

「『学修成果評価システム(LOAS)』の構築による PDCAサイクルのシステム化」

～「システム化」と「教職員協働」による
教育の「質向上」・「質保証」の徹底を目指して～

平成27年10月29日(木)

富山短期大学 副学長
経営情報学科 教授 安達 哲夫

I. 地域に根差す富山短期大学の特徴

1. 富山短期大学の現況

(1) 4学科1専攻科

(2) 在学生の状況

～富山県出身者が98%を占める

～卒業生の大半が富山県内に就職

(3) 専任教員38名、常勤職員23名(非常勤10名)

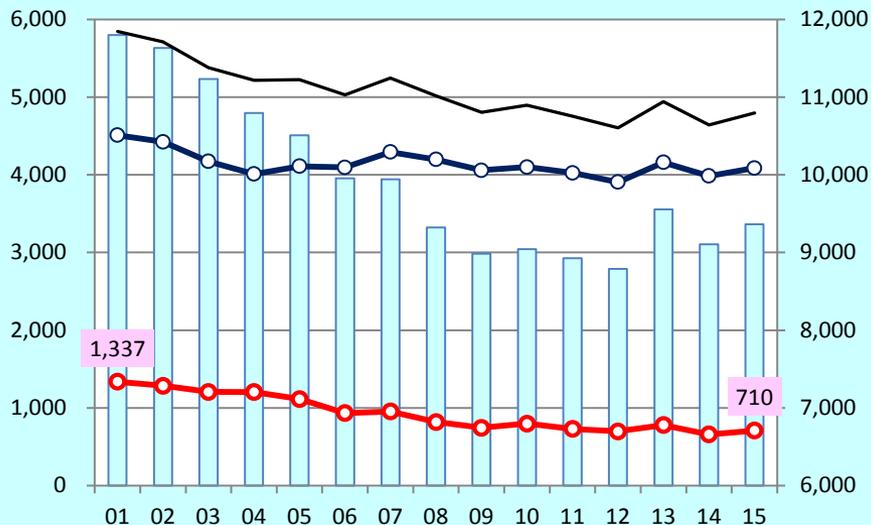
(4) 富山県の短大入学動向

富山短期大学 在学生の状況 (平成27年4月4日現在)

学科	入学定員	1年生	2年生	合計 (内、男子)	養成する主な専門職
食物栄養学科	80	104	79	183 (14)	栄養士
幼児教育学科	80	110	83	193 (4)	幼稚園教諭・保育士
経営情報学科	100	128	98	226 (36)	事務職・営業職
福祉学科	70	36	43	79 (23)	介護福祉士
合計	330	378	303	681 (77)	
専攻科食物栄養専攻	15	16	18	34 (0)	管理栄養士
総計	345	394	321	715 (77)	

【富山県】高卒者・大学等進学者数(人)

高校
新卒者



□ 高校新卒者 ● 大学進学者 ○ 短大進学者 — (小計)

【富山県】大学・短大進学率(%)

大学進学率
小計

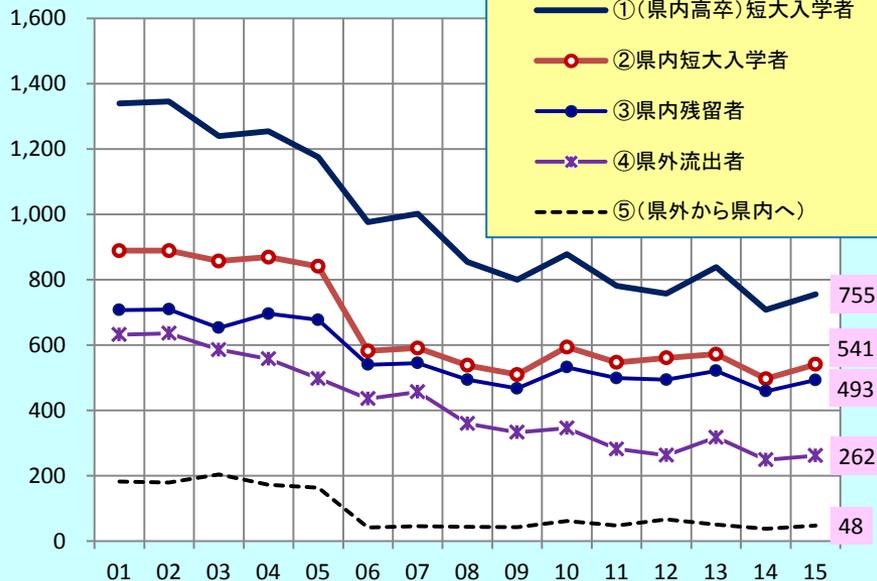
短大
進学率



● 大学進学率 — (小計) ○ 短大進学率

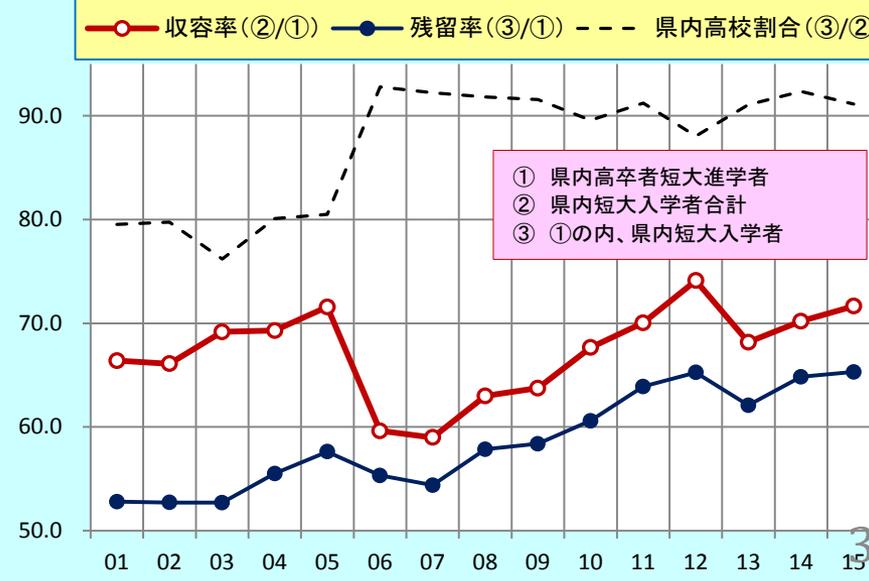
(右目盛)

【富山県】県内短大入学者の動向(人)



— ①(県内高卒)短大進学者
○ ②県内短大進学者
● ③県内残留者
× ④県外流出者
- - - ⑤(県外から県内へ)

【富山県】県内短大入学者の動向(%)



○ 收容率(②/①) ● 残留率(③/①) - - - 県内高校割合(③/②)

① 県内高卒者短大進学者
② 県内短大進学者合計
③ ①の内、県内短大進学者

2. (前身)富山女子短期大学(S38.4開学)の特徴

(1)「教養科」1科でスタートするも実学を志向

～「全人的な教養人」と「職業人としても役立つ女性」の育成を目指す

(2)建学の基本(「設立趣意書」(昭和37年10月1日))

「…真に近代社会が要請する婦人像を求め、家庭婦人としても職業婦人としても基本的に必要な、人間愛を基調にした高い知性、広い教養、そして健全にして豊かな個性と、社会性に富む調和のとれた全人的な婦人形成を建学の基本とする…。」

(3)富山県の風土と富山県民の気質、そして矢口新^(やぐち はじめ)氏の
影響

3. 現在の富山短期大学の特徴

～ 地域の学生を地域に送り出すための、実践的な職業人の育成 ～

【富山短期大学が育成する人材像】

- ① 豊かな人間性と高度な実践知・実践力を備えた専門職業人材
- ② 地域を活かし、地域を創り、地域に生きる地域基盤人材

Ⅱ. 小規模地方短大の強みを活かす方策

～地域のニーズに応えられる新しい革袋への絶えざる変化と改善

1. 小規模地方短大の強み

- (1) 「小回り」が利く組織 (⇒全学的・組織的・機動的な意思決定と実行)
- (2) お互いに「顔」が見える教育
- (3) 50年の地元密着の歴史と実績が生み出す「信頼」

2. 強みをどのように創り出し、どう活かすか

- ① 教職員のベクトル合わせ
⇒大学・学科の教育目標・DP・CP・AP等の共通理解の形成
- ② 教職員の具体的な行動指針・目標
⇒教職員の協働を促す具体的なアクションプラン・到達目標の作成と共通理解の形成
- ③ PDCAサイクルの実質化と不断の改善・改革
⇒可視化された指標・データに基づく到達目標の具体的なチェックと改善・改革案の作成
- ④ 効率的・効果的な教育・支援と事務合理化のためのシステム化の推進
⇒徹底した効率化・省力化による「より良い効果・成果」の追及

Ⅲ. 富山短期大学の教育改革の現状と今後の方向

1. 現在の教育改革の方向・柱

- ① 「教育目標」・「学位授与の方針(DP)」と「学修成果(Learning Outcomes)」の明確化
 - ～ 教員が「何を教えるか」ではなく、学生が「何ができるようになるか」を重視した、「社会的・職業的自立」を促す教育への質的転換と充実
- ② 「教育課程の体系化」
 - ～ 教育目標・学修成果を実現するための組織的・効果的なカリキュラム編成
 - ⇒ 「科目系統図」と「カリキュラム・マップ」の絶えざる点検
- ③ 「教育方法の転換」
 - ～ 「自ら主体的に生涯学び続ける力」を育成する「学修支援」への質的転換と充実
 - ⇒ ・「アクティブ・ラーニング」の活用
 - ・「ラーニング・コモンズ／スタジオ」の整備等学習環境の改善
 - ・「振り返り」と「気づき」を促すための情報のフィードバック
- ④ 「学修成果の測定・評価」
 - ～ PDCAサイクルを実質化するための「学修成果の可視化」
- ⑤ 「教育の質向上と質保証」
 - ～ PDCAサイクルの実質化による「内部質保証システム」の確立

2. 最近の教育改革の推進

- (H24.10) 文部科学省「私立大学教育研究活性化設備整備事業」採択
～「Webシラバス・システム」の構築
- (H25.10) 富山短期大学創立50周年(新講義棟及び新体育館・学生ホール竣工)
- (H25.10) 文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」Ⅰ．建学の精神を生かした大学教育の質向上」選定
- (H25.11) 文部科学省「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」交付内定
～「ラーニング・コモンズ」整備・「Webシラバス・システム」機能拡張
- (H26.8) 文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」選定
～「学修成果評価システム」構築によるPDCAサイクルのシステム化」
- (H26.10) 文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」Ⅰ．建学の精神を生かした大学教育の質向上」選定
- (H26.10) 文部科学省「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」交付内定
～3つのタイプの「ラーニング・スタジオ」の整備
- (H27.3) 短期大学基準協会の第三者評価において「適格認定」
- (H27.5) 「富山短期大学アクションプラン(2015～2017)」の策定

IV. AP事業の概要 ～AP事業で目指しているもの・課題

1. AP事業で目指しているもの

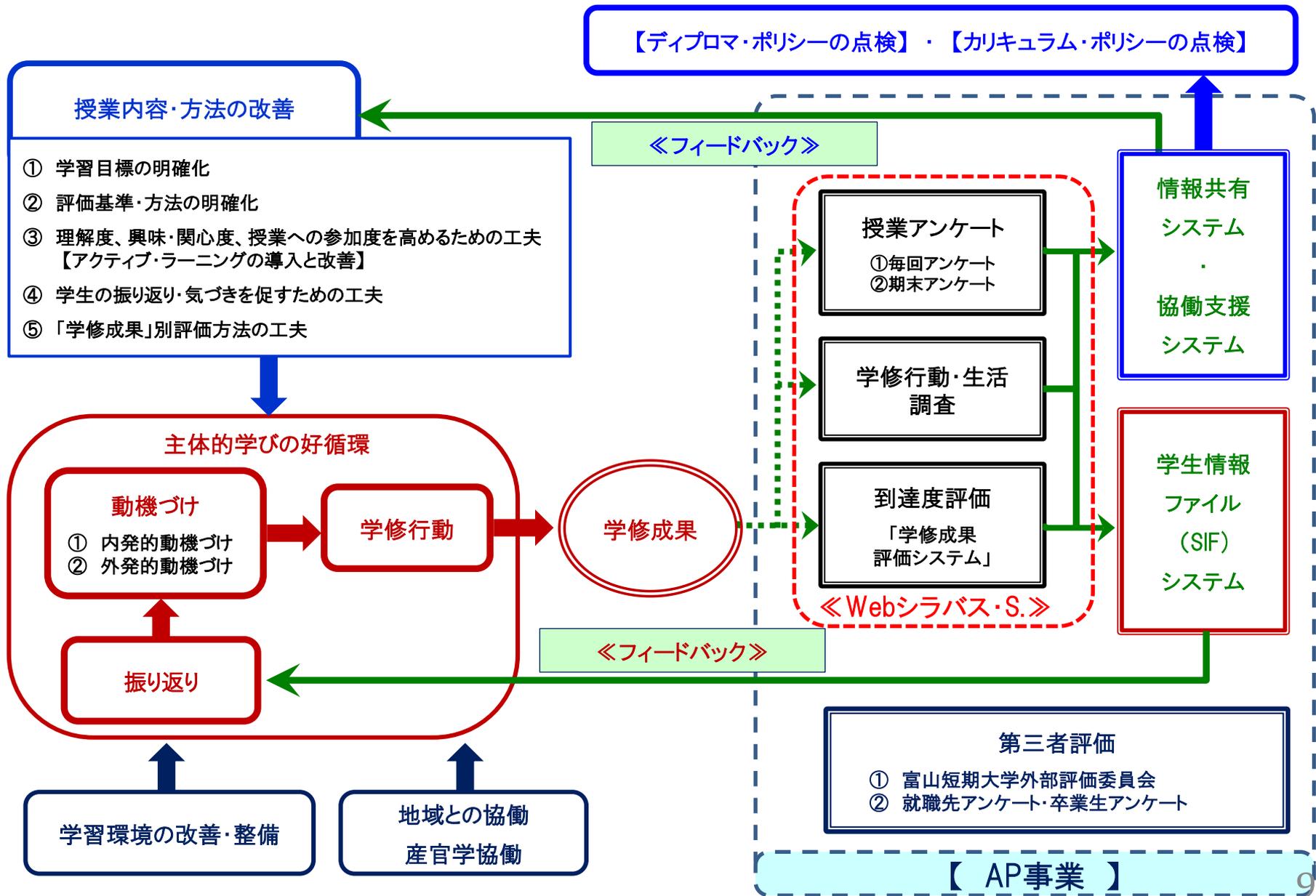
＝「教育改革」推進のためには、PDCAサイクルの実質化が必要。
そのためには、「学修成果」を数値化・可視化するためのシステムの構築が不可欠！

2. AP事業の5つの柱 【別添図参照】

- ① 「Webシラバス・システム」上に「学修成果評価システム(LOAS)」を構築
- ② 「Webシラバス・システム」上で各種「学生アンケート」を実施
(注:「(毎回)授業アンケート」、「(期末)授業アンケート」、「新入生アンケート」、「学修行動・生活調査」)
- ③ 「第三者アンケート」と「外部評価委員会」による第三者評価をPDCAに反映
- ④ 「学生情報ファイル・システム(SIF)」の構築による、学生への情報フィードバック
- ⑤ 「情報共有・協働支援システム」の構築による、教職員協働のPDCAサイクルの実質化

⇒「達成目標」の実現！

【AP事業】「学修成果評価システム」の構築によるPDCAサイクルのシステム化



AP事業の数値目標と工程表

工程表

平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
システム設計・準備段階	システム開発・運用開始		改善とためのPDCA	
【「学生アンケート」の実施 ～すべて「Webシラバス・システム」上で実施】				
①「毎回の授業アンケート」	⇒ 実施・学生へフィードバック	⇒ 内容の改善・実施		
②「(学期末)授業アンケート」準備	⇒ 実施	⇒ 学生へフィードバック		
③「学修行動・生活調査」準備	⇒ 実施	⇒ 学生へフィードバック		
【「学修成果評価システム(LOAS)」の構築】 ≪⇒ 科目・学科・全学の「学修成果(LO)」別成績の集計≫				
・成績入力システムの開発	⇒ 運用開始	⇒ 学生へフィードバック		
【「Webシラバス・システム」の機能拡張】				
①「課題ファイル」提出機能の拡張	⇒ 運用開始	≪⇒ 予習・復習時間の確保≫		
②アクティブ・ラーニング(AL)チェック機能の付加	⇒ 運用開始			
③「アクセス・ログ機能」の付加	⇒ 運用開始	≪⇒「Webシラバス・システム」の利用頻度調査≫		
【「学生情報ファイル(SIF)システム】				
	○ システム開発準備	⇒ 開発・運用開始	≪⇒学生への個別・全体情報フィードバック≫	
【「外部評価委員会」の開催と「第三者アンケートの実施」】				
①「第1回外部評価委員会」開催	⇒ 第2・3回	⇒ 第4・5回(中間評価)	⇒ 第6・7回	⇒ 第8・9回(最終評価)
②「就職先アンケート」の設計	⇒ 実施	⇒ 改善・実施	⇒ (同左)	⇒ (同左)
③「卒業生アンケート」の設計	⇒ 実施	⇒ 改善・実施	⇒ (同左)	⇒ (同左)
【FD/SDの実施】				
① 各種システムの利活用方法		★『利用の手引き』・『授業改善事例集』作成		
② 各種データに基づく授業改善の事例研究		★ (同上)改訂版の作成		
【AP事業報告書の作成】				
		★『中間報告書』		★『最終報告書』

【具体的な数値目標】 (注:ゴシック部分は文科省指定の必須指標)

	(最終年度(平成30年度))	H25	H30
① 各学生・全学生の数値的な学習成果の把握			
i) プレースメントテストの実施率(%)		24.5	100.0
ii) 学修成果別の成績評価の実施割合(%)		0.0	80.0
iii) 学修到達度調査の実施率(%)		0.0	100.0
iv) 学修行動調査(%)		0.0	100.0
v) 学生の授業外学修時間(時間)		未	20.0
vi) 授業外学修時間調査科目の割合(%)		0.0	80.0
vii) 「学生情報ファイル・システム」等を用いた学生への個別指導実施の割合(%)		0.0	13.6
② 成績評価基準の平準化、成績評価の厳格化			
i) 科目評価平均値が基準値以内の割合(%)		未	80.0
③ 学生による授業や大学に関する満足度調査			
i) 授業満足度アンケート実施対象学生割合(%)		46.4	95.0
ii) 授業満足度アンケートでの授業満足率(%)		78.4	80.0
iii) 退学率(%)		2.3	2.0
iv) 授業時の授業アンケート実施割合(%)		17.4	80.0
v) 学期末授業アンケート実施科目の割合(%)		39.2	80.0
④ 学生に対するアクティブ・ラーニング(AL)の実施			
i) ALを導入した授業科目数の割合(%)		36.5	66.8
ii) 学生一人当たりの年間AL科目受講数		未	20.0
iii) ALを導入した「講義」授業科目の割合(%)		19.5	40.0
⑤ 学生・教職員以外のステークホルダーからの評価			
i) 学生の主な就職先への調査		実施	実施
ii) 卒業生へのアンケート調査		未	実施
⑥ 改善活動の核となるFD活動の実施			
i) 専任教員1人当たりFD参加回数(回)		1.1	2.5
ii) 非常勤講師1人当たりFD参加回数(回)		0.0	1.0

【注】LOASは、Learning Outcomes Assessment Systemの略。SIFは、Student Informatin Fileの略。

3. 「Webシラバス・システム」の各種機能と開発・運用時期

【平成24年度開発】	【⇒ H25年度より運用開始(経情) ⇒H26年度より全学運用】
① 「シラバス」をインターネット上に置く	【※ スマホ/タブレット対応】
② 「ナンバリング」の実施・「科目系統図」の掲載	
③ 「履修登録システム」とのリンクによる、「Webシラバス・システム」での受講者管理	
④ 「Webシラバス」に教材を添付	【※ 添付資料は3つまで、計5MB】
⑤ 他の授業科目内容/インターネットのHPにリンク貼り付け	
⑥ 当該授業の「学修成果(L01~5)」・「学修成果(L01~5)別配点基準表」・「ルーブリック」を掲載 ※ 「学修成果」・「ルーブリック」についての理解を深めることにより、学生の到達目標が明確になる	
⑦ 毎回の授業アンケート	【⇒ H26年度に機能拡張】 ※・設問項目を拡大 ・自動集計機能 ・学生へのフィードバック機能
【平成25年度開発】	【⇒ H26年度より運用開始】
⑧ 「課題提出機能」を付与	【⇒ H26年度に4つまでの「課題」を提出可能】 ※・「反転授業」が可能(⇔予習課題提出) ・「双方向授業」が可能(⇔授業中課題提出) ・グループワーク成果の比較が可能(⇔授業中課題提出)
【平成26年度開発】	【⇒ H27年度より運用開始】
⑨ 各種「学生アンケート」の実施機能 ※ 「新入生アンケート」・「学修行動・生活調査」・「(期末)授業アンケート」	
⑩ 授業形態・方法のチェック	【※ AL型授業数・形態の自動集計】
【平成27年度開発】	【⇒ H28年度より運用開始】
⑪ 「学修成果(L01~5)」別成績入力システム 【⇒「LOASJ」】	
⑫ 「カリキュラム・マップ」の自動作成機能	
⑬ 各種学生アンケートの実施と自動集計、ならびに集計結果の教職員・学生へのフィードバック	
⑭ その他	

4. (AP事業)「学修成果の可視化」で目指しているもの

1. 「学修成果」のアセスメントの主体・方法・手段は？

評価主体	評価方法・手段
① 教員	① 客観テスト(期末試験) ② パフォーマンス評価(ルーブリック)
② 学生	① 「(期末)授業アンケート」 (「到達度」の自己評価) ② 「学修行動・生活調査」 (「成長度」の自己評価)
③ 第三者	① 「第三者(就職先・卒業生)アンケート」 (「到達度」の第三者評価)

2. 「学修成果の可視化」で何を検証するのか？

- ① 「学修成果」の到達度
- ② 「学修成果」の成長度
- ③ 「学修成果」の社会的通用性

3. 検証の結果、何を改善するのか？

- ① 教育課程プログラム(カリキュラム編成)の検討・改善
- ② 授業内容・方法の改善
- ③ 学修行動の変容・改善

4. 【結論】その結果、何がどうなる？

～「内部質保証」のための「PDCAサイクル」の実質化

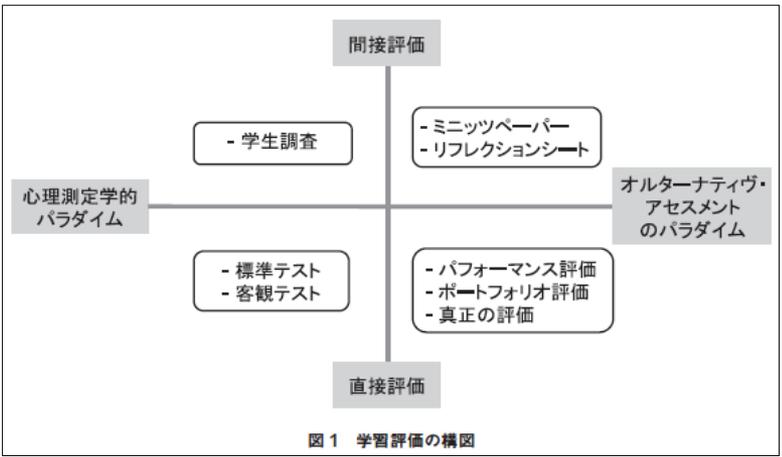


図1 学習評価の構図

(出所)松下佳代、「パフォーマンス評価による学習の質の評価」(京都大学高等教育研究第18号(2012))

5. 「学修成果」のアセスメント・可視化による検証・改善項目

評価主体	アセスメントの方法・手段	レベル			評価・調査項目	「学修成果」到達度・成長度等の検証	改善項目		
		個々の学生	授業科目	学科(課程)			学生の個別指導	授業改善	カリキュラム編成の検討
教員									
1	客観テスト	○	⇒ ○	⇒ ○	① 「学修成果(L01~3)」到達度	◎	●	●	●
2	パフォーマンス評価 ・ルーブリック ・ポートフォリオ等	○	⇒ ○	⇒ ○	① 「学修成果(L03~5)」到達度	◎	●	●	●
学生									
1	(毎回)授業アンケート	○	⇒ ○		① 理解度 ② 興味・関心度 ③ 授業への参加度 ④ 授業外学習時間 ⑤ ミニッツ・ペーパー	△	●	●	
2	(期末)授業アンケート	○	⇒ ○	⇒ ○	① 「学修成果(L01~5)」到達度に関する自己評価 ② 授業方法の工夫に関する評価 ③ 授業内容に関する評価 ④ 授業効果・成果に関する評価 ⑤ 総合評価 ⑥ 学修行動に関する自己評価	◎		● ● ● ●	●
3	学修行動・生活調査	○		⇒ ○	1 「学修成果(21の能力)」成長度に関する自己評価 2 短大生活満足度 ① 総合評価 ② 項目別評価 ③ 充実度 ④ 短大の勸奨度 3 学習・生活行動 ① 授業への出欠 ② 学習・生活時間 ③ 友人関係 ④ 短大生活への適応度	◎	●		●
第三者									
1	就職先アンケート			○	① 短大生採用の際に重視する能力(21の能力) ② 採用した本学卒業生の能力(21の能力)評価 ③ 授業・教育の改善方向	◎			● ● ●
2	卒業生アンケート			○	① 卒業後の就業状況 ② 離職状況・理由 ③ 仕事を行う上での、「学修成果(21の能力)」の必要性 ④ 本学での「学修成果(21の能力)」の到達度評価 ⑤ 本学への満足度	◎			● ●

【参考】(経営情報学科)教育目的・目標、ディプロマ・ポリシー(DP)、 「学修成果」、「カリキュラム・マップ」(イメージ)

(経営情報学科) 教育目的・目標、ディプロマ・ポリシーと「学修成果」	
(1) 教育目的・目標(学則第2条の2第3号)	
自ら学び、考え、実践する能力と健康で豊かな人間性を備え、ビジネス実務に関する実践的な知識・技能と幅広い教養を活かして地域社会の発展に貢献する職業人の育成を目的として、経済・経営・会計、情報、ビジネス実務等に関する教育及び研究を行う。	
(2) 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)	
経営情報学科では、十分な学習成果を挙げて、本学科が育成する人材に必要な以下の力を身につけ、本学の卒業要件を満たした者に短期大学士(経営情報学)の学位を授与する。	
(3) 「育成する人材」に必要な力	
① 健康で豊かな人間性と真摯な人間関係力	
② 社会常識・マナーをわきまえた、責任ある行動力	
③ 自ら学び、考え、実践する能力と学び続ける姿勢	
④ 経済・経営・会計、情報、ビジネス実務等の実践的知識・技能	
(4) 学習成果(能力基準別到達目標)	
(L01) 知識・理解力	健康で豊かな人間性と真摯な人間関係力を支える、幅広い教養を身につけるとともに、思考・判断力や自ら学ぶ力の基礎となる、経済・経営・会計、情報、ビジネス実務等の専門分野に関する実践的知識を身につけている。
(L02) 技能・表現力	課題解決に必要な情報を収集・分析・整理し、自らの思考・判断のプロセスを明確に説明することができる。
(L03) 思考・判断力	社会や組織の諸課題を自ら発見し、経済・経営・会計、情報、ビジネス実務等の専門分野に関する実践的知識並びに研究方法を用いて、論理的に分析し考察することができる。
(L04) 関心・意欲・態度	経済・経営・会計、情報、ビジネス実務等の専門分野に関する実践的知識を実践力に高められる。その上で、社会や組織における自らの役割を自覚し、そこでの諸課題を自らのこととして積極的な関心を持ち続け、自ら学ぶことを通じて社会人としての責任を果たすことができる。
(DP5) 人間性と人間関係力	社会・組織の一員として、独善に陥らず、人を尊重し、人の気持ちを思いやり共感できる。

(経営情報学科) カリキュラム・マップと教育方法／評価方法・手段 (イメージ)					
授業科目群	LO1 知識・理解力	LO2 技能・表現力	LO3 思考・判断力	LO4 関心・意欲・態度	LO5 人間性・人間関係力
教養関連科目	日本語 異文化理解 【外国語科目】		生涯学習／現代社会と人間 異文化理解 コミュニケーション		
キャリア/ビジネス実務関連科目	ビジネス実務 関連		インターンシップ キャリア講座		ビジネス実務 関連
【専門科目】 経済・経営・ 会計・簿記関連科目	【経済学・経営 学・会計学・金融 論等】	簿記検定 FP等	【経済学・経営 学・会計学・金融 論等】		
【専門科目】 情報関連科目	情報基礎科目 プログラミング データベース システム設計 Webデザイン	PC検定	情報基礎科目 プログラミング データベース システム設計 Webデザイン		

教育方法	講義・演習 / 演習・実習・体験 アクティブ・ラーニング (グループワーク、発表・プレゼンテーション、PBL等)
------	--

評価方法・手段	<ul style="list-style-type: none"> 客観テスト、(資格取得) 学生の自己評価(授業アンケート、学修行動・生活調査) ルーブリック(小論文・レポート、プレゼンテーション、実習(インターンシップ))
---------	---

V. 検証・改善(例)

【注】各種アンケートの回答率

(平成27年度前期) 各種学生アンケートの回答率 (上段:回答数、下段:回答率、除く非常勤担当科目)								
	実施年月	全学	全学(除く専攻科)	専攻科	食栄	幼教	経情	福祉
新入生アンケート (1年)	H27.4	365	351	14	100	98	121	32
		92.6	92.9	87.5	96.2	89.1	94.5	88.9
学修行動・生活調査 (2年)	H27.4	306	291	15	74	78	98	41
		95.3	96.0	83.3	93.7	94.0	100.0	95.3
(期末)授業アンケート (1年)	H27.7	4,373	4,216	157	883	1,278	1,702	353
		83.3	83.1	89.2	84.5	82.9	83.1	80.4
(期末)授業アンケート (2年)	H27.7	2,328	2,240	88	456	954	524	306
		62.4	62.1	69.8	48.8	63.9	78.7	59.9

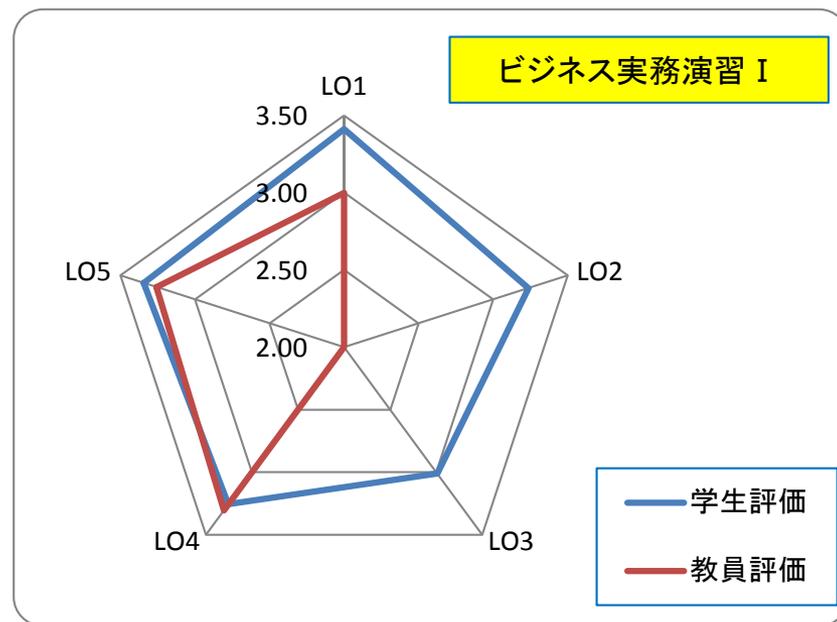
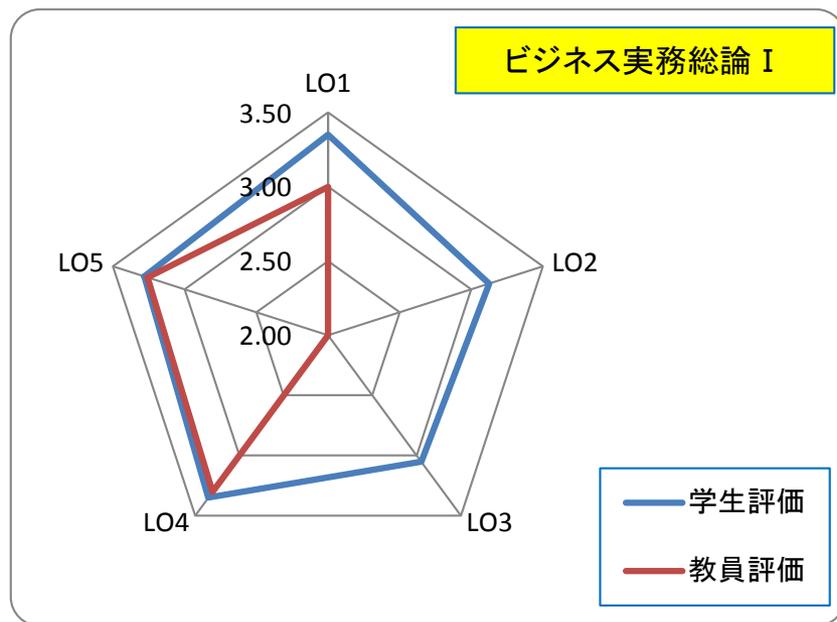
(平成27年度前期) (期末)授業アンケート実施状況 (開講科目()内は通年科目、除く非常勤担当科目)			
		全学	全学(除く専攻科)
1年	開講科目数	78 (9)	68 (1)
	実施授業数	78	68
	実施率	100.0	100.0
2年	開講科目数	90 (9)	77 (9)
	実施授業数	81	69
	実施率	90.0	89.6

【注】 開講科目数は、()内の通年科目数を除く。
実施率は、通年科目を除いて計算。

1. 「学修成果」の可視化による検証

(1) 「学修成果」の到達度の検証【教育課程・科目・学生レベル】【毎期末】

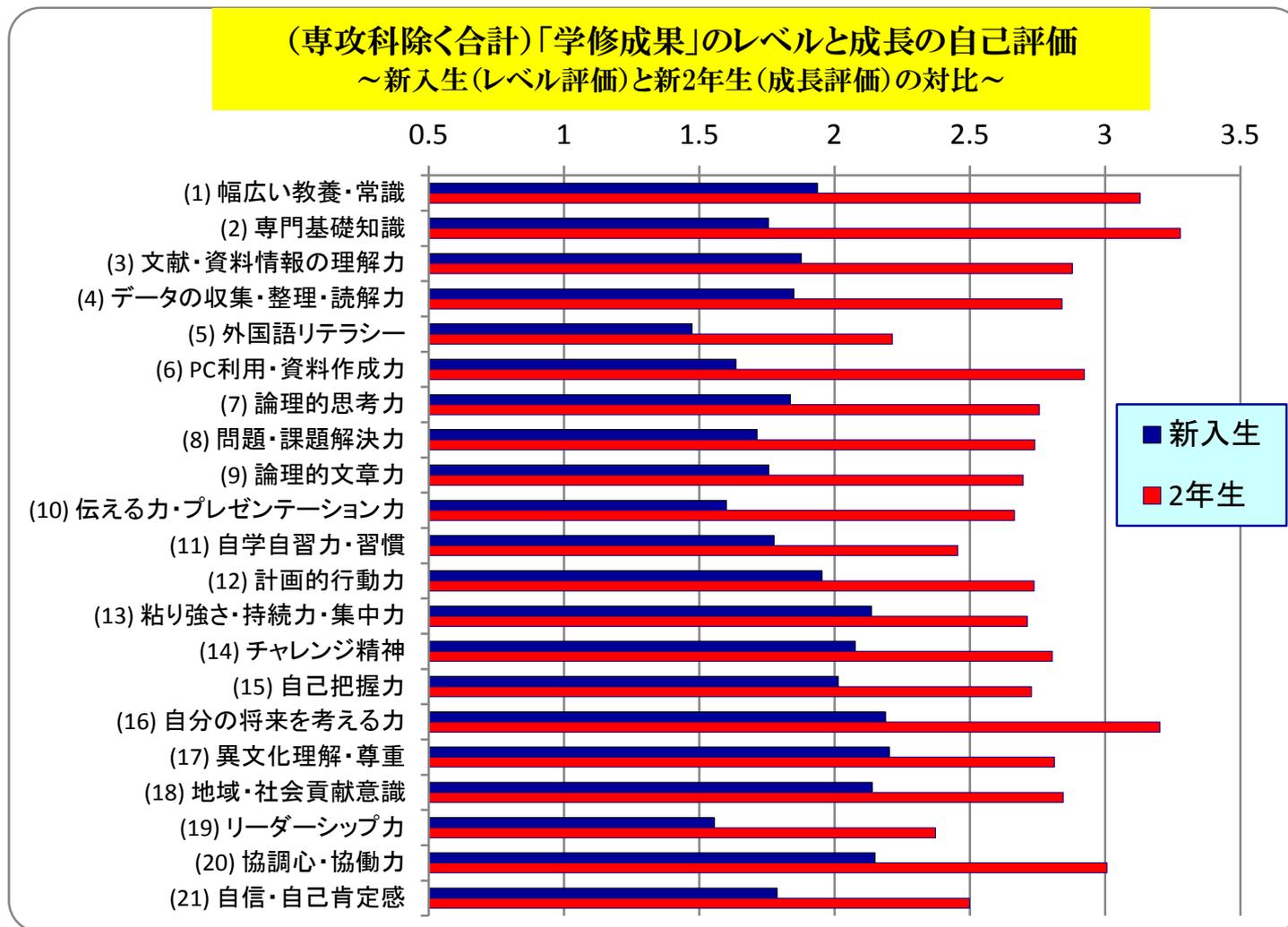
- ① 教員による「学修成果」別成績評価と、学生の自己評価(「(期末)授業アンケート」)との対比 (未)



(平成27年度)にLOASの構築により、教員による「学修成果」別成績の
学科別集計・全学集計が可能となる！

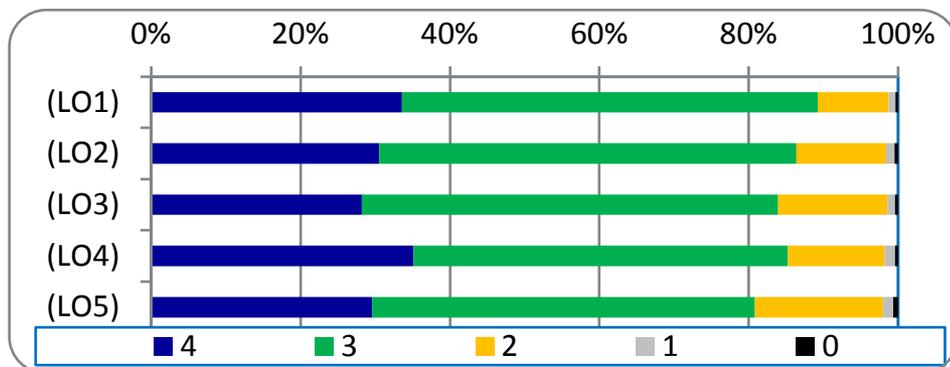
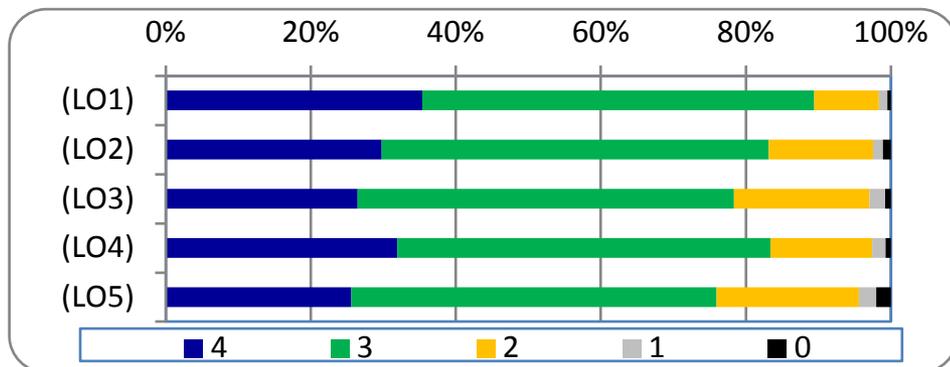
(2)「学修成果」の成長度の検証 【教育課程・学生レベル】 【年度末】

- ① 教員による「学修成果」別成績評価の経年変化（未）
- ② 学生による「学修成果」(21の能力)別自己評価(「学修行動・生活調査」)の経年変化（未）

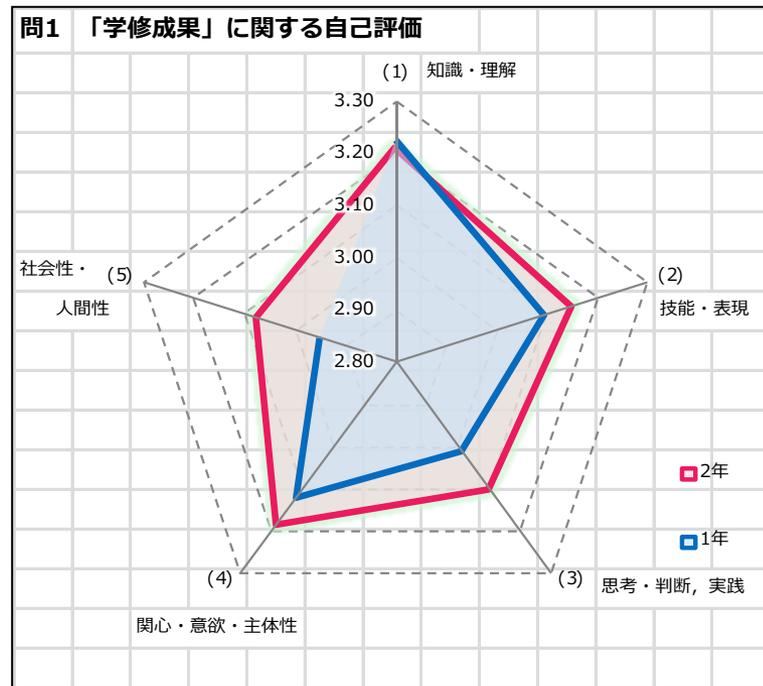


【参考】「学修成果」別自己評価の1・2年比較

(上図:1年、下図:2年)



(青:1年、赤:2年)



(3) 「学修成果」の社会的通用性の検証 【教育課程レベル】 【定期的】

- ① 「就職先アンケート」による「学修成果」(21の能力)別評価 (未)
- ② 「卒業生アンケート」による「学修成果」(21の能力)別評価 (未)
- ③ 「外部評価委員会」における検討 (未)

【注】 検討内容

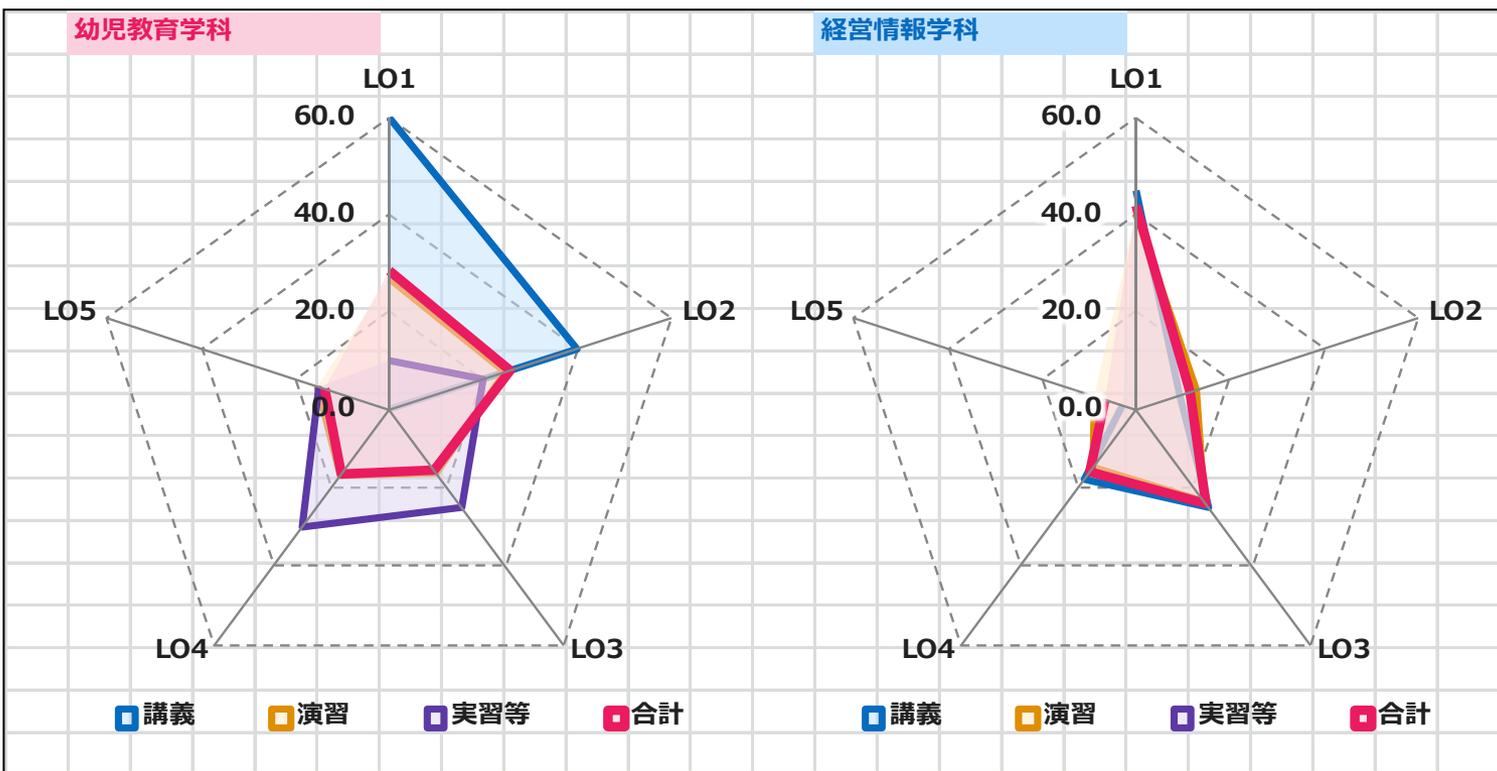
- ① 授業で目標とすべき、社会的通用性のある「学修成果」の具体的内容
- ② 「学修成果」の具体的な「到達レベル」と「その評価方法」
⇒「ルーブリック」の具体的内容
- ③ 社会的通用性のある「学修成果」の有効な「授業内容・形態・方法」
⇒実効性あるPBL型授業の内容・方法等？

2. 「学修成果」の可視化による改善事項

(1) 教育課程プログラム(カリキュラム編成)の検討

- ① 「学修成果」の到達度・成長度の検証結果
 - ⇒「カリキュラム・マップ」(LOと授業科目との対応表)の検討 (未)
 - ⇒H27年度に「カリキュラム・マップ」自動作成機能構築
- ② 「学修成果」の社会的通用性の検証結果 (未)

【参考】 幼児教育学科と経営情報学科のLO別配点分布

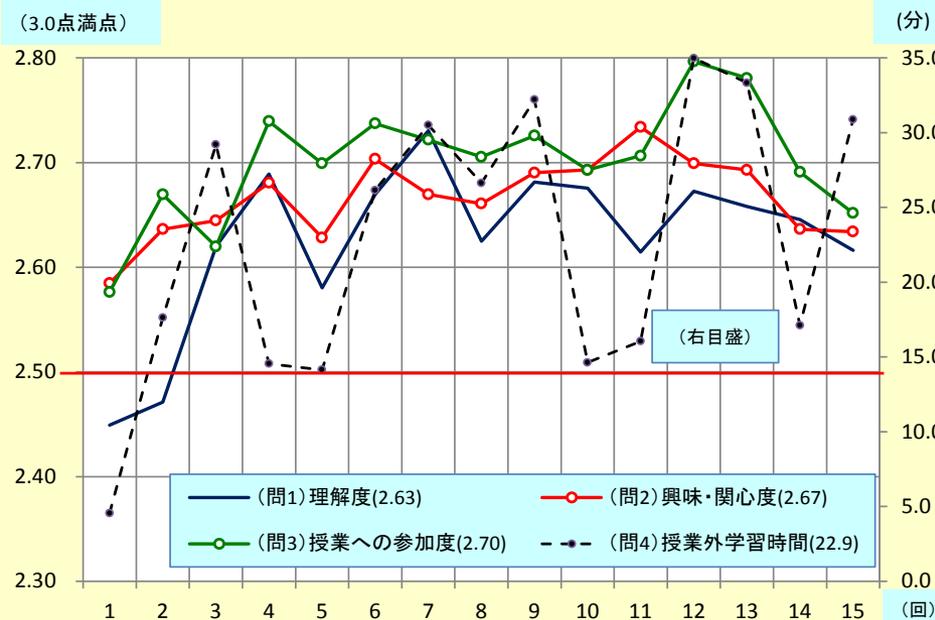


(2) 授業改善 【⇒『授業改善レポート』】

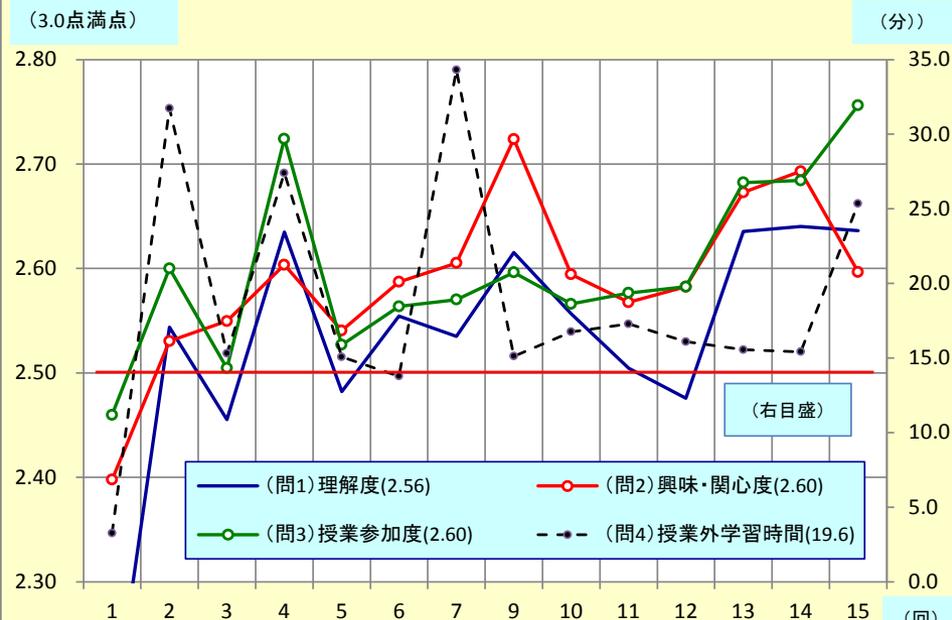
① 「(毎回)授業アンケート」

⇒ 理解度、興味・関心度、授業への参加度、授業外学習時間等を改善するための工夫

(H27前期)ビジネス実務演習 I (毎回)授業アンケート結果



(H27前期)ビジネス実務総論 I (毎回)授業アンケート結果



【注】「ビジネス実務演習 I」(1単位)・「ビジネス実務総論 I」(2単位)

- ① 1年前期
- ② インターンシップ(1年夏休み)・就職活動に向けた準備
- ③ 「総論 I」:ビジネス関連知識の講義中心
- ④ 「演習 I」:「ビジネス実務マナー検定」等の練習問題をGW
- ⑤ いずれも、GW専用ルーム。「総論 I」も極力GWを採り入れる。

【選択肢例】

- (3点)大いに理解できた
- (2点)理解できた
- (1点)あまり理解できなかった
- (0点)全く理解できなかった

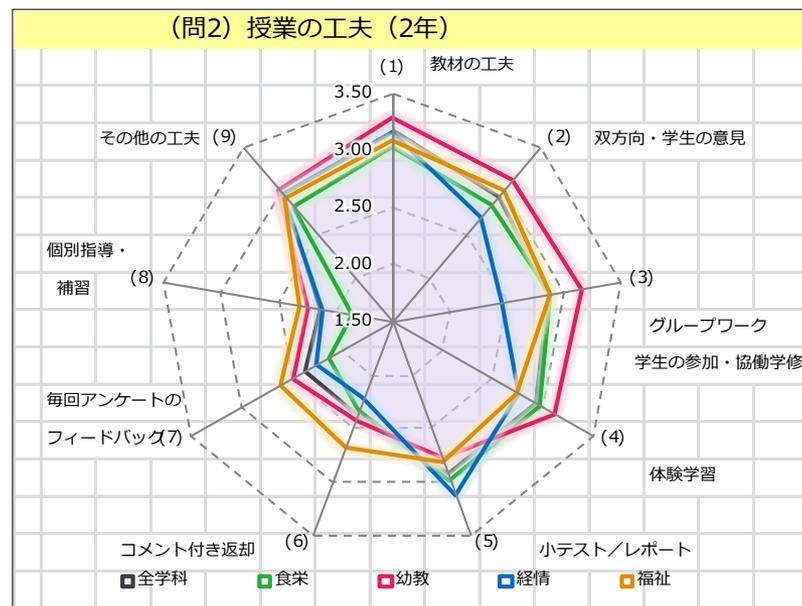
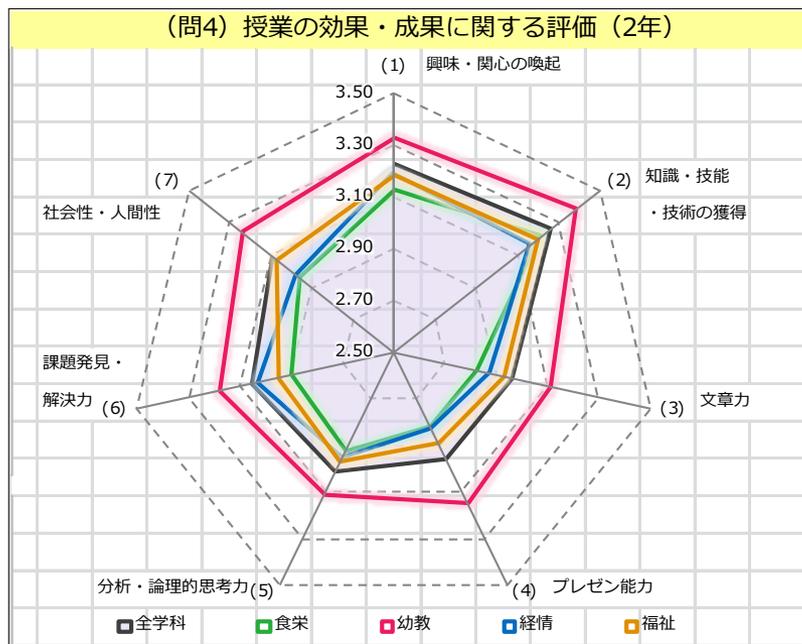
【参考】「(毎回)授業アンケート」から得られること ～「ビジネス実務演習Ⅰ・総論Ⅰ」の例～

- ① アクティブ・ラーニング(グループ・ワーク(GW))の効果
⇒ 理解度、興味・関心度、授業参加度を高める上で大きな効果
- ② (予習を前提とした)「反転授業」によるGWの効果
 - 予め自分の考えをまとめ、GWで他者の考えを聴くことにより「振り返り(Reflection)」と「気づき」を促す上で多大な効果!
 - 「授業外学習時間(=予習時間)」を高める
- ③ 学外研修(での女将の講話)や学外での講演会等の「共通体験」を利用した、「反転授業」によるGWは多大な効果
⇒ 「共通体験・話題」が、自他の考え方の違いをより明確にし、「振り返り(Reflection)」と「気づき」を促しやすい!
- ④ (当然ながら)理解度、興味・関心度、授業参加度が高い方が、「授業満足度」も高い!

(2) 授業改善 【⇒『授業改善レポート』】(続)

② 「(期末)授業アンケート」

⇒ 授業方法ならびに効果・成果の改善のための工夫



【課題・対応】

⇒ 「アクティブ・ラーニング」型授業の内容別集計【平成27年度末】

⇒ 「授業改善レポート」の作成【平成27年度前期末】

(⇒『授業改善事例集』の作成【平成28年度】)

⇒ 「アクティブ・ラーニング」型授業に関するFD/SDの実施と、授業改善事例の共有

【参考】「授業改善レポート」の作成(平成27年度前期～)

⇔ 学科・科目によって、「学修成果」を上げる方法・工夫は大きく異なる。
その方法・工夫を共有し、「授業改善」につなげていく！

◆ 「授業改善レポート」の内容

(1) (当該授業に関する)「(期末)授業アンケート」集計結果

【参考】「(期末)授業アンケート」の学科別集計結果

(2) 授業改善レポート

① 概況

- ・ 教員が努めた点・意図した点が、学生に評価されているか？
- ・ 総合評価・満足度に関する教員の感想

② 課題

③ 改善計画

⇒(平成28年度)『授業改善事例集』の作成

3. 【再】「学修成果」の可視化による検証・改善事項

I. 「学修成果」の可視化による検証

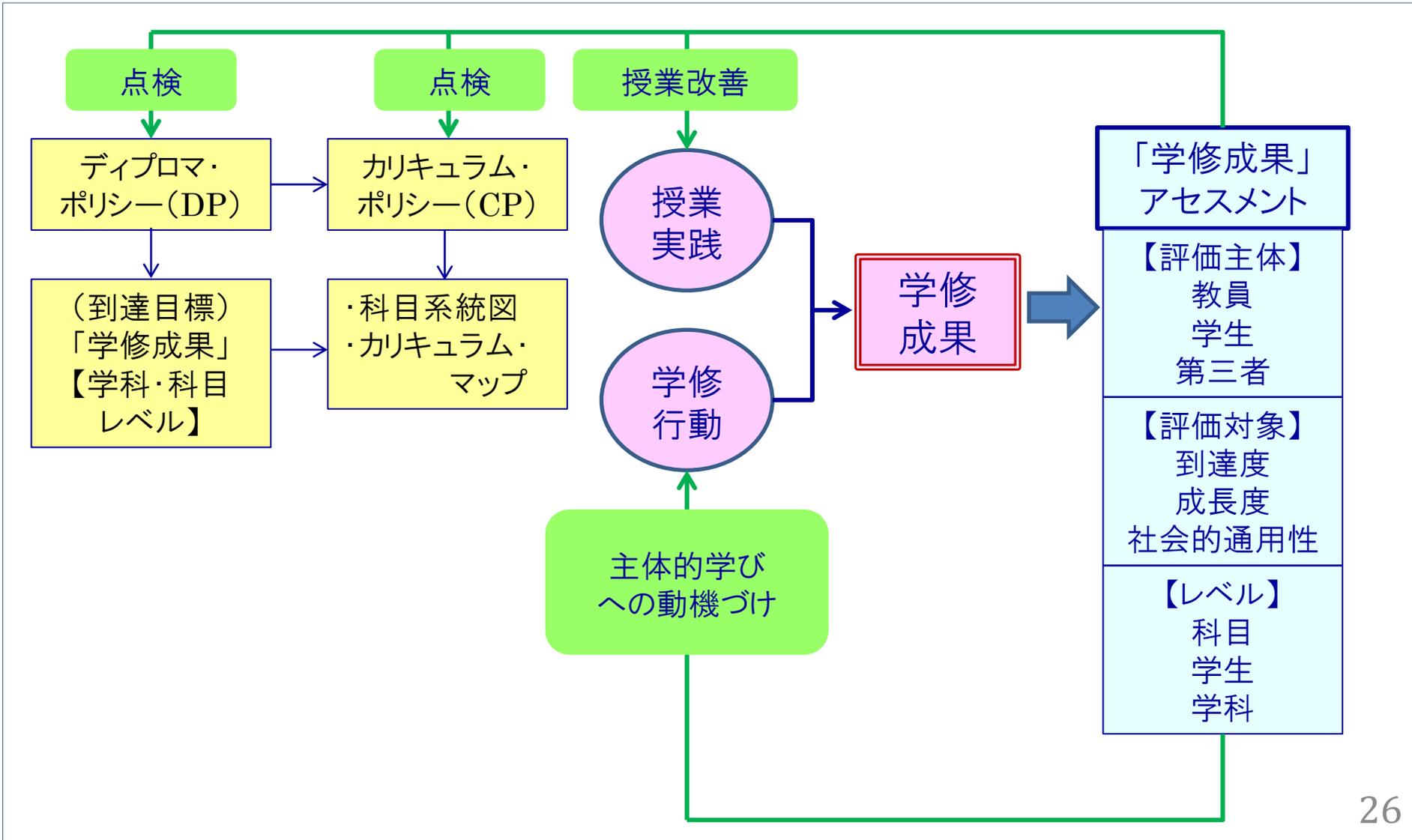
1. 「学修成果」の到達度の検証 【教育課程・授業科目・学生レベル】	【毎期末】
① 教員による「学修成果」別成績評価と、学生の自己評価(「(期末)授業アンケート」)との対比	(未)
2. 「学修成果」の成長度の検証 【教育課程・学生レベル】	【年度末】
① 教員による「学修成果」別成績評価の経年変化	(未)
② 学生による「学修成果」(21の能力)別自己評価(「学修行動・生活調査」)の経年変化	(未)
3. 「学修成果」の社会的通用性の検証 【教育課程レベル】	【定期的】
① 「就職先アンケート」による「学修成果」(21の能力)別評価	(未)
② 「卒業生アンケート」による「学修成果」(21の能力)別評価	(未)
③ 「外部評価委員会」における検討	(未)

II. 「学修成果」の可視化による改善事項

1. 教育課程プログラム(カリキュラム編成)の検討	
① 「学修成果」の到達度・成長度の検証結果	
⇒ 「カリキュラム・マップ」(LOと授業科目との対応表)の検討	(未)
② 「学修成果」の社会的通用性の検証結果	(未)
2. 授業改善 【⇒『授業改善レポート』】	
① 「(毎回)授業アンケート」	
⇒ 理解度、興味・関心度、授業への参加度、授業外学習時間等を改善するための工夫	
② 「(期末)授業アンケート」	
⇒ 授業方法ならびに効果・成果の改善のための工夫	
3. 個別指導による学修行動の変容・改善	
① 「学修成果」の到達度・成長度と、「学修行動」の特徴との関係に関する検証から、改善方策を検討	(未)

VI. まとめ

1. 「内部質保証」のためのPDCAサイクル



2. 「小規模短大」の強みを創り活かすには

① 「選択と集中」

⇒ 地域が強く求める分野に的を絞り、真に実践力のある人材を育成する

② 「短期集中」

⇒ 2年間という短期間で、集中的かつ効率的・効果的に人材を育成する

③ 「システム化」

⇒ 「効率化」を図り、「より高い効果・成果」を目指す

⇒ 極力システム化・省力化を図り、「顔の見える教育」に注力する

④ 「協働」

⇒ 多様な専門分野の教職員の「コラボ」が相乗的な成果を生む

ご清聴ありがとうございました。

何卒、ご指導・ご教示賜わりますよう
お願い申し上げます！

